
私がワタシは私

一筆

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

私がワタシは私

【Nコード】

N6888E

【作者名】

一筆

【あらすじ】

僕と梧さんは写真部部長。毎日雑談なんかをしてすごしていた。だけど、そんななんてことない些細な日常は、彼女が部活に来なかった日に壊れた。『夏ホラー2008』百物語編』参加作品。

早く 会いたいな 早く 早く 早く

段々日が短くなる秋口。夏の名残に蝉がどこかで鳴いている。

いつも通り写真部の部室で窓から街並みを見下ろしながら、僕はデジタルカメラを布で拭いていた。雲に覆われた街は薄暗い。

この部室は四階にあり、放課後になれば生徒のとおりはほとんどなくなる。だからとても静かで、隔離された気分になる。今のところ僕しかいないからなおさら。もう一人の部員はまだ来ていない。図書委員会だとか。早く来ればいいのに。そう思いながら、僕は窓際の席についた。

かっかっかっ

そのつまらない空間に、廊下を駆ける音が響いてきた。だけど、これはもう一人の部員のものではない。こんなふうに駆けるタイプじゃないから。

「やつほー、郷原くん」

ノックなしでドアが開けられた。廊下と部室の境界にクラスメイクトの女の子が立っていた。長身で髪は短い。だから遠目で見たら男の子に見えてしまうかもしれない人だ。手には筆記ボードを持っている。その人は知り合いだった。

「佐田さん、こんにちは」

佐田さんは答える代わりに頬笑んだ。僕も頬笑み返した。

と、さも彼女が部員であるかのような挨拶を交わしたが、佐田さんはこここの部員ではない。何をしに来たんだろう？

「佐田さん、どうしたの？」

「部活監査だよ。ここはちゃんと活動してるかな？」

佐田さんの説明に、僕は合点がいった。

彼女は生徒会の役員だ。だから、こうやって部活の活動状況を聞

きに来たのだろう。以前何度か生徒会がやって来たことはあったが、佐田さんが来るのは初めてだ。

「お疲れ様」

「いえいえ。で、早速質問！ 今日の活動時間は？」

「四時から五時までかな？」

「活動人数は？」

「おそらく二人」

「うーん。新入部員来ないと、そのうち同好会に格下げされちゃうよ！」

ボードで止めてある書類に何やら記入しながら、さらりときついことを言う。

「余計なお世話だよ」

生徒会に言われると不安になってくる。

「まだヘーキよ。来年度員が入ればいいんだから！」

安心するに値しない救済案を出され、僕は苦笑してしまう。

「そんなやる気ない笑い方しない！ 君らならなんとかなるよ！」

フォローを入れ忘れない辺りが生徒会の器かな？

「それじゃあ、これから一週間、毎日調べに来るからね。じゃあ、バイビー！」

アイドルみたいな笑顔で、彼女は視界から姿を消した。かっかっかっの音がふたたび聞こえ、ドップラー効果のようにどんどん離れていった。

と思つたら、逆の方から違う足音が聞こえてきた。こつっこつっこつっ、という足音。

「こんにちは、郷原くん」

開いたままのドアからひよこつと顔を出したのはもう一人の写真部部員、高須^{たかすくぬぎ}梧さん。清廉可憐、なんて言葉がぴったりかな？ 髪は肩にとどくぐらい長く、今時の女子高校生にしてはめずらしくスカートも長い。僕は男子としてかなり背が低い方だけど、彼女はそんな僕よりも小さい。

「こんにちは、栞さん」

栞さんはドアを閉めながら含羞した。いつもはこうやって挨拶のあとにはにかむ。

「さつき、佐田さん来てた？」

僕の前の席に鞆を置き、ちょこんとしゃがんで僕と視線を合わせた。しゃがんだとはいえ、少し体を前屈させたのとかわからないけど。

「うん。生徒会の部活監査だったよ」

「そうなんだ。佐田さん、大変だね」

僕と栞さんは、去年佐田さんと同じクラスだった。二年生になった今年、僕と佐田さんが同じクラスで、栞さんは隣のクラスになった。

「ふーん。あつ、蝉、鳴いてるね」

栞さんは視線を窓へ移した。こつこつこつと窓に近付き、外を覗き込んだ。

「あの森にいるんだ、きつと」

彼女は一人満足そうに頷いた。

森はこの高校から徒歩で五分ほど離れた場所にある。この高校はもともと市街地の外れに位置しているため、森は住宅の見当たらない田園風景の中に忽然と生えている。その森の中には廃墟に近い状態の神社がある。

「久し振りに久岩神社へ遊びに行かない？」

窓の外から顔を戻し、期待ばかりの目を僕に向けた。

僕は頷いた。

久岩神社へ遊びに行ったら帰りは遅くなるだろうから、帰りの仕度はしていくことにした。

僕らは市内に住んでいるから、通学方法は自転車を採っている。だけど、なんとなく、僕らは自転車に乗らずにそれを押して森へ向かった。辺りには野原と田んぼが広がり、右の果てにのびている住宅街の上に、色彩の元が浮かんでいる。

「本当に久し振りね、神社へ行くの」

「そうだね。楳さんが写真部へ入って決めたとき以来だね」

楳さんは頷く。目を細めて頷く仕草は、疑いを知らない子供みたくいで愛くるしかった。

彼女が写真部に入ったのは、高校一年生の夏休み前。これから僕らが向かう森の中にある、小さな神社の境内でのこと。

一年生のころ、楳さんは極端に人との付き合いを避けていた。休み時間、彼女はいつだって一人だった。部活にも入っていないらしく、彼女が一日のうちで声を発したのは、多分、朝の出欠のときと授業で指されたときぐらい。それがやたらと目についた。クラスの女子の中心人物になっていた佐田さんが、そんな楳さんを心配して話し掛けている場面を時々見掛けた。だけど、いつも楳さんは顔を強張らせ、眼をおろおろ震わせていた。

そんな楳さんと初めて話したのが神社だった。

六月の初め頃、僕は学校近くの森へ写真を撮りに行った。いつも窓から見えていた森に興味があった。冒険心とも言うのかな？ とにかく一人で森へ出かけて行った。

森の入り口は車道からさりげなく延びている横道で、軽自動車ならば辛うじて一台とおれそうな古道だ。

木々のトンネルを潜りながら、僕は目に留まった花や景色を撮った。カメラは部活に置いてあるデジタルカメラなので、いくら無駄

な写真を撮ってもすぐに消せる。だから気兼ねなく撮った。

森へ入って五分ぐらいすると、左手に開けた場所が現れた。とはいえ、頭上は柯葉が幾層にも重なり、日の光を芒とさせている。そこには汚れて赤なのか黒なのかよくわからない色をした鳥居が立っていた。そこは境内で、境内中に雑草が茂り、石畳や石塀が所々欠けていた。鳥居の先には遠めにもおんぼろな社が建っていて、その社は石垣で一段高い位置にあった。その石垣に設けられた石の階段に体育座りをしている女の子がいて、それが高須楳さんだった。

膝に顔を埋めていたから誰だかわからなかった。見ず知らずの人と関わるのも面倒だから、気付かれる前に去ろうと思って踵を返した。だけど、境内に独り言が微かに響いていることに気付いて、足を止めた。何を言っているのかわからなかった。

しばらくなんともなしに無言で見ていると、視線に気付いたのか空間の異変に気付いたのか、今まで顔を伏せていた楳さんが顔を上げた。そこで僕らは互いの存在を認めた。クラス、というか学校自体から孤立しているクラスメイトだと気付いた僕は話し掛けていた。なんて話し掛けたかな？「高須さんですか？」、なんて聞いたと思う、多分？ 良く覚えてないや。

どんなことを僕が言ったのかは覚えていないけど、彼女がどんな風であったかは覚えている。最初、彼女は僕のことを不審者に迫られているような呈を示した。さりげなくも何も、かなりわびしかった。それでも気を取り直して「どうしたの？」と聞いたら、「私に関わらないでください」って言った。急に立ち上がって帰る準備をして、今みたいに自転車を押し、僕の横を早歩きでとおり抜けて行った。反射的に「またね」って挨拶すると、楳さんは一度立ち止まり、目を見開いて僕を見た。睨めっこが三秒ぐらい続くと、彼女はぎこちなく一礼して帰って行った。

それから時々、僕が森へ写真撮影しに行くと、これまた時々体育座りをしている楳さんに会った。その度に話し掛けてたから、きっと鬱陶しがられてたと思う。だけど、そのうちちゃんと話せるよう

になった。夏休みに入る一週間ぐらい前の日に、やっぱり偶然神社で会って、「写真部に入っても、いいですか？」と彼女は言った。同級生が一人もいなかったから、嬉しかった。すぐに楳さんを連れて部室に戻って、呆気にとられている先輩たちに楳さんを紹介した。部活でも、当初は先輩たちとうまく話せていなかったけど、そのうち平気になっていた。

でも、クラスでは無言だった。ただ、佐田さんとはなんとか話せるようになってた。僕も佐田さんとならなんとか話せていたし、楳さんとは、気付けば男子女子とか意識なしの友達感覚で接しられた。

かたつかたつかたつ

社へ続く石畳の上を歩くと、そんな音が響いた。自転車の車輪が回る音とも重なって、かしゃかた、かしゃかた、かしゃかたと不調和を奏でた。

「懐かしい。去年のままだ」

石畳から外れた砂利の上に駐輪し、石階段へ駆け寄った。初めて会ったときと同じ姿勢で彼女はそこに腰掛けた。ただ、俯かず、僕を見て頬笑んだ。僕は微笑を返し、彼女が停めた自転車の横に自分の自転車を停めた。それから彼女の傍へ向かった。

「雨、降るのかな？」

木々で覆われた小さな空を見上げて、心細そうに呟いた。僕も点だらけの天上の奥を流れる灰色を見た。

「曇ってる」

「晴れてはいないね」

しばらく無言のまま、僕らは空を仰いでいた。だけど、近くで蝉の鳴く声がして、同時に視線を相手の顔に移した。それで互いに目を細めたりした。

「カメラ、持ってきたの」

彼女は自転車の籠を指差した。籠の中には彼女の鞆が入っている。カメラはきつとその鞆に入っている。マトリョーシカみたいだ。

裙さんは立ち上がり、自転車まで駆けた。僕はゆっくり近付いた。「何撮る？」

聞くと彼女は颯と振り返り、両手で構えたデジタルカメラのレンズを向けた。それは部活のものではなく、彼女個人のもの。勾玉のストラップがついている。

かしゃつと音がして、場の空気が白んだ。

「何してんの？」

「いや、そのう……なんとなく
はにかむ。」

「とりあえず保存で」

「消してよー！」
はにかむ。

梧さんにはにかみまくられると、どうしても自分の意見をとおす
気がなくなる。

「んん、じゃあ、いいけどさ、そんなの残してどうするの？」

「なんだろう……アルバムでも作る？」

「今更部活の？」

「ダメ？」

「ダメじゃないけど」

「ついでに郷原くんのアルバム作ろう！ 写真集！」

「それイヤだ！」

「えー！」

と不満を漏らしながら梧さんはカメラを構えた。僕は咄嗟に体を
左へ滑らした。かしゃつと音がする。

「あー、ぶれちゃった」

ディスプレイを確認して梧さんは言う。

「消去しよう」

「影分身中の郷原くんってタイトルで」

「いらぬいよ！ 破棄しよう！」

梧さんは幼稚園児みたいに澀刺と笑った。僕がカメラを奪おうと
すると、カメラを握っている両腕を伸ばして僕の手が届かないよう
にした。僕とカメラのあいだに自分自身の壁を設け、悪戯っ子の笑
みを浮かべ続けている。

「もう、いいよ」

諦めを零すと、また梧さんはカメラを構えた。だけどシャッター
は切らなかつた。構えただけ。

「どうしたの？」

「カメラ、止まっちゃった？」
「えっ？」

楳さんはカメラのレンズを上向きにして、そのレンズを覗き込んだ。近付き、なんとなく一緒にレンズを覗き込んだ。途端に、シャッターが切れた。

「つて、楳さん！」

「引っ掛かった！」

騙されてムツとしたけど、ちょっと頬笑む僕。楳さんがちょっと悪びれながら笑ってる。それが飼い主にじゃれる仔犬みたいに見える。た。

「仔犬みたいだな」

咄嗟に思いついた意味不明な言葉を述べた。

「犬……」

一言前までは明るかった表情がオセロの駒みたいにひっくり返って、それとは対象的な表情を呈した。

「ゴメン、気に障った？」

まさか彼女の気分に影響を与えるとは思ってなかったから、とても焦った。

「いや、なんでもない」

なんでもないとはいえない顔で彼女は言う。犬にまつわる悲しい過去でもあるのかな？……そういえば、前になんか話してたような。

「ゴメン」

「なんで謝るの？」

楳さんは陰りのない顔で言った。

「それより、雨、かな？」

木々が、かさかさつと音をたてはじめた。

雨が降りはじめ、僕らはすぐさま帰ることに合意した。

「雨」

「帰ろう」

土の匂いが煙り、僕らの周辺は静謐な雰囲気になっていた。僕らがここにいることはだいぶ場違いだな、と自転車にまたがりながら思った。

「傘、持つてる？」

裙さんが聞く。彼女は折り畳み傘を鞆の中に忍ばせていた。けど、僕は生憎用意がなかった。だから僕は首を振った。

「えっ、どうしよう……まだ小雨みたいだけど、強くなったらずぶ濡れになっちゃう」

「だから、早く帰ろう」

僕はペダルを踏み込んだ。裙さんはすぐに続いた。柄の部分が伸びているだけで開かれてはいない傘を持ったままだった。

「差さないの？」

「森、出るまで」

歩くと二、三分は掛かる森の入り口まで、自転車だと半分も掛からずに着いた。直接雨に曝されているコンクリートの道路がずぶ濡れている。空を切る雨の線が目に見える。意外と雨は強かった。

「どうする、郷原くん？」

傘を差して裙さんは聞く。その顔は僕よりも困った呈をしていた。「どうしようかな……ここでなら、雨宿り出来るかな？」

さすがにずぶ濡れはイヤだから、ちよつとのあいだ様子を見ようかと思った。すこし待ってもかわらないようなら諦められて濡れながら帰ればいい。

「雨宿りなんて無理だよ！ 風邪引いちゃう！」

裙さんの言うとおり、頭上は木で覆われていても雨が結構降って

くる。雨に濡れない期待は持てそうにない。

「傘、一緒に入るう」

逡巡もなさそうに楳さんは言った。

「折り畳み傘だけど、きつと、大丈夫。だから、行こう」

僕が何かしら言う前に楳さんは話しを進めた。傘に入れてもらえれば雨を避けられるだろうけど、小さな折り畳み傘じゃ、二人とも肩の辺りは雨で濡れるに違いない。僕だけならいいけど、楳さんは雨で風邪を引いたことがあるらしいし……。

「いいよ、べつに。僕こそ大丈夫」

「雨は怖いんだよ！ 簡単に風邪を引かせるんだから！」

彼女はぐつと傘を握る拳を突き出した。真剣な顔でそんなことを言われると、どうしても苦笑しちゃうな。

「じゃあ、お願いしようかな」

彼女は破顔した。

僕は自転車の右側に回り、左側から自転車を押す楳さんの横にならぶようにした。頭上に心許ない大きさの水色の六角形が広がった。「じゃあ、行こう」

自転車を押しながら帰路につく。案の定、傘に入りきれない左肩がさっそく濡れはじめた。

僕らは地元の駅までは同じ通学路で、駅のロータリーで左右にわかれる。

「小学生のとき、雨の中傘差して帰ってたなら、野良犬に襲われたことがあるの。傘をダメにして、雨に濡れながら家に帰ったの。そしてたら風邪引いちゃって。怖いよね、雨って。それよりも犬かな」

いつだったかな。楳さんはそんな話をした。そのとき、どうしてかな？ とても楳さんが悲痛そうにしていた。犬に襲われた思い出があったから、さつき顔が強張ったのかな？

駅へ向かうあいだ、僕らは始終無言だった。元来楳さんも僕も話すことを苦手としているから、普段はこうやって沈黙の中にいるこ

とが多い。楳さんが話してくれるのは、何か話したいことがあるときだけ。僕から話すことがあればいいんだけど、生憎話すネタがなかった。

駅傍にあるスーパーの、住宅街へとおり抜け可能な駐輪場で僕らはわかれることになった。ここの頭上はスーパーの二階部分で屋根になっている。ひとまず自転車を停めて挨拶する。

「傘、ありがとう」

「どういたしまして。でも、肩、濡れちゃったよね？」

「平気だよ、これぐらい。それに楳さんだって」

彼女は苦笑いを浮かべた。

「この傘、貸せばいいんだけど」

また大層なことを言ってくれる。僕は両手と首を振った。

「そんな心遣いはいいよ」

「でも、傘差してきた意味ないし……」

「平気平気！ 家、ここからすぐだから」

そう言い笑った。楳さんは「ゴメンね」って笑った。

五

あ また 一緒に いる

楳さんと別れた。彼女は駅前を右へ行き、僕は左へ向かう。

「あれっ？ 郷原くんじゃないか」

自転車にまたがり直してすぐ、背後から声を掛けられた。振り返ると、黄色い傘を差して自転車に乗っている佐田さんがいた。

「ああ、佐田さん」

「ああ、じゃないよ！ 君、傘は！」

自分の傘を指差しながら聞いてきた。僕は首を傾げてみせた。

「持っていないの？」

「はい」

佐田さんは溜息をついた。

「風邪引いちゃうよ」

楳さんと同じことを言った。おかしくて笑ってしまった。

「何がおかしいの？」

「楳さんも同じこと言ってたんです。だから、一緒だなあってすると佐田さんも笑った。」

「ほらあ、高須ちゃんも心配したんじゃないか！ 心配させちゃダメでしょう！」

その結論は良くわからないけど、楳さんに心配を掛けるのは良くないな。反省だな。

「そうですね。今度からはちゃんと家を出る前に天気予報を確認します」

「そうしなさい。で、これから君はどうするの？ 百円ショップで

でも傘買つてくの？」

そんなつもりはないから首を振る。

「それじゃあ、どうするの？」

「濡れながら帰ります」

「ダメだよ！ 私の傘に入りなさい！」

佐田さんは自分の傘をふたたび指して言う。

「悪いからいいよ」

「悪くないからそうしなさい。それに、本当は生徒会の生徒が傘差し運転はまずいから」

「そういえば、傘差し運転はダメになったんだっけ？」

「運転してなきゃ大丈夫になる！」

「関係ないと思う……」

「ヘーキヘーキ！」

佐田さんは僕の左肩に触れ、押した。だけど、すぐに左肩が濡れていることに気が付き、「ほら、肩が冷えちゃう！」と怒る。

結局僕は佐田さんの傘に入ることになった。僕よりもじゃっかん背の高い佐田さんは、大きな傘を差して僕の頭上を雨から遮断した。なんとなく、自分が佐田さんの弟になったような気分。庇護されている感じで恥ずかしかった。

「そういえばさ、高須ちゃんは元気かい？」

歩き出して間もなく聞いてくる。僕は元気であることを伝えた。

「そう。なら良かったよ。だってほら、高須ちゃんって郷原くんとか話してないみたいだからさ」

二年生になったものの、彼女の人見知りには直っていないらしい。

まあ、性質ってそうかわるものでもないから。

それから僕らは黙り合った。だが、住宅街に差し掛かったとき、おもむろに佐田さんは口を開いた。

「ところでさ、君、女の子は大事にしなよ？」

意図がわからず佐田さんの顔を覗き込んだ。

「いきなりなんですか？ 大事にとって？ 楳さんのことですか？」

友達は大事にしてるけど」

僕がそう答えると、佐田さんは不快を覚えたように眉を吊り上げた。それから目を泳がせ、ちよつと息を吐いた。つまり呆れさせたらしい。

「そうじゃなくてさあ、まあ、いいんだけどさあ、思慕されてんだからさあ」

「……？」

僕らは立ち止まっていた。辺りに人通りはないから、邪魔だけど邪魔にはならない。

「君がどうだかは知らないけど、でもさあ、気付いてって感じだけどさあ」

佐田さんはにっこりした。いや、にっこりされても……。

「あのう、それ、どういう意味？」

「そのままの意味よ。わからないようなら自分で考える！」

僕はなんとも答えられず、意味もなく傍にあった町内の掲示板に目を向けた。そこには夏祭りのポスターが残っていたり、何年も前から貼られている不審者注意や家出少年搜索のポスターが貼ってあったりした。いい加減取り替えるよ、と思う。これは現実逃避。

「とにかく、一度考えた方がいいよ！ 考えるべき！」

そんなことを言われてもなあ……。

「とにかく、君がそれじゃ可哀相でしょ。というより、郷原くんは鈍いから、もつと積極的になればいいのかな？ なんとも言えないけどさ」

一人で思案する佐田さんに、僕は疑問符を飛ばし続けるしかなかった。

「……」

また だ また 一緒

しばらく進んだ丁字路で、僕は左へ曲がった。佐田さんは右へ曲がらなきやいけないみたいだけど、左へ曲がった。

「もうすぐだから、いいですよ」

「すぐならいいじゃん」

佐田さんの人の良さには言い返す言葉もない。だけど、僕としては、いち早く一人になりたかったんだけど……。そもそも僕は楳さん以外の女の子と話すのはやはり苦手なのだ。楳さんはほら、同じ部活だし。佐田さんは小、中学が同じだったからなんとなく大丈夫だけど、あくまでなんとなく。

「あ、着きました」

やっと家に着き、思わず息をつく。佐田さんにはその意図がわからなかったのか、「家に帰るだけで疲れなさんな！」と言った。

「傘、ありがとうございます」

「いいよいいよ。それじゃあ、またね！」

彼女は傘を持つ手をぶんぶん振った。いやあ、パワフル。

僕も手を振り返し、彼女の姿が見えなくなるまで見送った。

「さて」

僕はドアを開け、ただいまを唱えた。中からおかえりが返ってくる。

佐田さんの意味深発言を忘れたわけじゃないけど、いちいち考えたって仕方ないし、そもそも何を考えればいいのかわからないからその日はいつもと同じサイクルを経て寝た。翌日もサイクルに従って七時半に学校へ向かう。学校にはそれで四五分頃につくのだが、いつも誰もいない。学校なのに誰もいないっていうのが面白い。そ

こでばーとしてるのが好きだったりして。

雨は上がり、空は晴れではなく曇り。

自転車を漕ぎながら、佐田さんが昨日言っていたことを思い出した。

『思慕されてんだからさあ』

本当に佐田さんは何が言いたかったんだらう？

やっぱり良くわからない。だって思慕って辞書引くと、どうにも僕には無関係そんな意味が出てたんだもん。

学校につき、教室で一人ぼーとしている時間は、それほどなかった。僕が教室に着いて鞆から教科書を出しているあいだに、佐田さんがやって来た。いつもより早い。

僕と佐田さんの席はわりと近く、佐田さんは僕に話し掛けてきた。

「今日さ、これから図書委員の仕事の手伝いがあるんだけど、予定より早く来ちゃったんだよ！」

「図書委員の仕事の手伝い？」

「そうそう、高須ちゃんも一緒だよ！ 来てるかな、高須ちゃん？」

ちよつと見て来ようかな

そう言っつて佐田さんは隣のクラスへ行った。だけどすぐに戻ってきた。どうやらいなかったらしい。

「まあ、まだ時間あるし。でさ、郷原くんは昨日のことちゃんと考えたかい？」

「……えつと」

やっぱりその話しをするのか……。

「考えたって…… 楯さんは同じ写真部の仲間ですよ」

「そうじゃなくてさあ」

佐田さんは腕を組んで苦笑する。

「まあ、いいや、もう」

佐田さんは溜息をつく。「郷原くんだもんね」なんて言われる。

「酷いですね」

「君のセリフじゃないと思う!」

……………。

「君、君君君! じゃあ、ちゃんと聞いてね!」

声を潜め、でも意気込んで、さらには顔を近付けて言う。……………怖いし恥ずかしい。

「君はとある女の子に好意を持たれてるんだよ」

「……………はい?」

「以上! あとは郷原くん、よく考えましょう! あつと、時間来た!」

言うだけ言って佐田さんは教室を去ろうとした。だが廊下へと向かおうとしてすぐに立ち止まった。怪訝に思っただが佐田さん越しの向こうを見ると、教室の入り口に楳さんが立っていた。というか、とおり掛かったときに覗き込んだという感じだ。

「高須ちゃん! おはよう!」

佐田さんは楳さんに近付き挨拶を交わした。楳さんは訥々と挨拶を返した。それから佐田さんは楳さんを連れて図書室へ向かった。去る際に、楳さんが物憂げに僕を一瞥した。

二人が去ってから、楳さんと挨拶をし忘れたことに気付いた。

いつも 一緒 許さ ない 私 が 本当は

梧さんが写真部に顔を出さなかった。これまでそんなことはなかった。

「おかしいな……どうしたんだろう？」

こういう場合、連絡を取った方がいいのかな？ 僕も梧さんも携帯電話は持っているから、互いのメールアドレスは知っている。電話番号も知っている。だけど、これまでに連絡を取ったことがない。休む連絡も、そもそも休まないんだからしたことがない。

まさか、昨日の雨で風邪でも引いていたりしたのかな？ それを無理して学校来て、やっぱり無理だつて帰ったのかな？

時計を見ると、もう五時近い。そういえば、今週は部活監査週間と言っていたはずなのに、なぜか佐田さんが来ない。佐田さんはホームルームが終わってすぐ、僕に「ちょっと用があるから、部活監査に行くの遅くなるかもしれない」とわざわざ言っていた。だけど、もはや来ないじゃないか。

なんだか、梧さんといい佐田さんといい、ちょっと寂しかったりする。

窓から街を見下ろした。夕暮れが頭にくるぐらい怖くて、きちがいなほどうつうつしい。

結局五時になった時点で梧さんも佐田さんも現れず、僕は一人、誰もいない部室の電気を消して学校をあとにした。

帰る途中の信号機で捕まり、その間を使って携帯電話を開いた。梧さんから連絡が入っていたりしないかな、と妙な期待を持っていた。だが、連絡なんて入っていなかった。かなり寂しい。

帰ったら、メールしてみようかな。

やっぱり風邪とか引いてたら心配だし、そうでないにしても休ん

だ理由が気になる。

そう決めたとき、ちょうど信号がかわった。

『今晚は、栞さん。メールしてすいません。で、どうしたんですか？ 栞さんが休むなんてめずらしいね。』

だから何？ 栞さんでなければそんなリアクションを返されそうな文面を見ながら、送ろうか送るまいか一時間ほど悩んでいた。いい加減にしないと夜遅くなってしまふ。今は八時だ。

「でもなあ……………」

栞さんが心配で不安は募ってるけど、佐田さんの言ったことが、今更気になる。気になるとどうしようもなく、さあ、どうしよう？

明日になれば、普通に来るかもしれない……………」

うん、そうだ。でも、なんだか不安。やっぱり、送ろうかな。でもなあ。

悩んでもしょうがないかな。

勢いでいけい、ということを送信ボタンを押した。しばしの通信時間を経て、通信完了。後悔。よくわかんないけど、後悔。

返事来なかったらどうしよう。

返事は来なかった。

送信してから四時間。今は深夜零時。だけど、これまでに僕の携帯電話は沈黙こそ全てという状態。

でしゃばりだったのかな？

なんだか、恥ずかしい。

「もう、寝よう……………」

電気を消してベッドに横になった。携帯電話は机の上に置いておいた。

ぴりりり……………ぴりりり……………ぴりりり

暗い世界で電子音が響いた。突然のことに目が微かに覚めた。音

はまだする。

顔の向きをかえると、机の上で何か光っていることに気がついた。もそもそ起き上がってみると、携帯電話が着信を報せるランプとメモディ作動させていた。

「こんな時間に……迷惑メールかな？」
とにかくうるさい。

携帯電話を手に取り、煌々とするバックライトの表示を見た。そこには普段時刻と曜日だけが表示されているのだが、今はAM1:27に加えて高須栞とも表示されていた。メールのときはメール着信と表示されるはずだが、そうでないということは

「電話？」

僕はそこでやっと携帯電話を開いた。やっぱり電話の着信であった。すぐさま通話ボタンを押し、受話口を耳元に押しあてた。

「もしもし」

「……………」

答えは帰ってこなかった。

「栞さん？」

とりあえず名前を呼んでみた。だが、それにもやっぱり無反応だった。

「もしもし。栞さん？」

「……………」

「おーい！ 聞こえてる？ 聞こえてるなら返事して！」

「……………」

「……………」

「……怖いよ」

「……………えっ？」

きつと 私は 人で 無し

「暗いよ、怖いよ……」

受話口から続けて聞こえてくる。言葉とは裏腹に、その声は酷く落ち着いているように思えた。

「楳さん？」

間違いなく声は楳さんだった。だけど、雰囲気が違う。というより、楳さんと初めて話したときはこんな感じだった。

「どうしたの？ えっと」

「神社」

「神社？」

神社って、あの神社？

「……郷原くん」

「何？」

「もう、戻れない、んだ」

「戻れない？」

何を、言ってるんだ？ 戻れない？ 何から？

「楳さん、いったい、どうしたの？」

「気付いたら、もう、無理、だった」

えっ、と、ちよつと待った！

「ちよつと待って。楳さん、だから、いったいどうしたの？」

「……」

「……楳さん？」

急に、受話口からの声は途絶えた。耳が痛くなるような沈黙いや、何か聞こえる。雨、かな？

カーテンを開けて外を見ると、夜は闇と微かな雨音で溢れていた。
「フフフツ」

不意に潜めた笑い声がとどいた。冷笑。ハッピーエンドのあとに訪れるバットエンドへの伏線みたいな笑い声。

「もう遅いね」

「……？」

声がじゃっかん違う。女性にはかわりないんだけど、楳さんじゃない。似ているけど、違う。

「楳さんじゃ、ないね。……楳さんをどうした」

「郷原くん。君は罪だね」

「……誰だよ、おまえ？ それに、どういうこと？ それよりも楳さんは！」

「落ちつけよ。ワタシが誰だって？ 誰だっていい。どういうことだって？ 君がわかってないだけさ。楳かい？ 気になるなら来ればいいさ。楳は言っただろう？ 神社だって」

声の主はくつくつ笑う。

「死んじやうよ、郷原くん」

くつくつ声が脳内にはびこる。今、なんて言った？ シンジャウヨ？

「死んじやうってなんだよ！ 楳さんに何した！」

「君、君君君！ そんな質問はナンセンスさ。自分で確かめて見ることだね」

あれ？ 今、なんか、聞き覚え、ある……。

「佐田さん……」

「……？」

「佐田さんなのか？」

君、君君君 これは、佐田さんが今朝言っていた。

「それも確かめてみればいい」

そうして通話は切れた。ぼーと一瞬なっってから、慌てて着信履歴から掛け直した。だが、電源が切られたらしく通じなかった。

「……楳さんが 行かなきゃ」

すぐさま着替えてポケットに携帯電話をしまつと、家を飛び出し

た。自転車にまたがり、夜中の街を学校方面に漕ぎ出た。雨は降っている。だけど、傘なんて差しても邪魔になるだけだ。それに小雨だから気にならない。雨の線が自転車のライトに映し出されてちょっと不気味だけど。それよりも

「なんで、佐田さんが？ どうして楳さんを……」

放課後楳さんも佐田さんも来なかったのは、佐田さんが楳さんをあの神社へ どうしたんだ？ 連れ出したの？

考えてもわからない。わかるのはわからないってことだけ。

ほぼ無意識のままペダルを漕ぎ、僕はどんどん鎮守の森へ向かって行った。

当たり前すぎる話といえばそうだけど、人の手入れが入っていない神社なんかには街灯なんて代物はない。それはそこへ向かう道に關しても同じだ。

闇。夜よりも深い闇。森への入り口は、お笑い芸人ですら冗談の一つも言えなさそうなほど、暗く深く容赦ない。この世とあの世を繋ぐ入り口って、きつとこういうのを言うんだろうな。この先、神社だし。

怖いと思わないわけがない。怖すぎる。こんなところには少しだつていたくない。だけど、楳さんはこの先にいる。佐田さんも……。「そもそも、怖がつてる場合じゃないか」

僕は自転車を降り、ライトを頼りに歩き出した。人の心の闇の方が明るいんじゃないかと思われるほど暗い鎮守の森の闇は、自転車のライトを容易く呑み込んだ。

かたかたかた かさかさかさ

チエーンの音と雨が葉にあたる音。それだけが空間を支配している。

ここだ。境内だ。

きつと森に入ってから二、三分しか経っていないんだろうけど、僕にはそのあいだが一時間にも感じた。境内は雨音にまみれていた。

木々の間隙から落ちた雨が石畳を打ち、そこから中で不協和音。ぼんやり社の輪郭が浮かんでいる。枝葉がせせら笑う。自転車のライトは自家発電式だから、停まっている今は点かず。雨が強くなった。竦んでいる足を進めた。それと同時に目の前に自転車のライトがぼんやり道を作る。

……何か、ある。

石階段の一番下。そこに、明かりを反射する何かがあった。さらに近付くと、それがカメラであることがわかった。

「これ、楳さんの」

そこにあつたカメラには勾玉のストラップがついていた。
じゃらっ

カメラを持ち上げた瞬間、背後で音がした、のは、わかっ

……

……なん、だ？

なんだか、やかましい。

「……どこだ、ここ」

どうやら床のようなところでうつ伏せになっているようだ。埃っぽい。

「……つつー！」

起き上がるうとしたとき左の米噛みに激痛が走った。手で触れてみると腫れていることがわかった。しかも手が濡れた。心地良くない感触でこれが血であることがなんとなくわかった。

「後頭部、殴られたような気がしたけど……」

痛むのは米噛みだけではなかった。左耳の横が地味に疼く。触れてみると腫れている。血は出てないみたいだ。米噛みが痛むのは、倒れたときに石段にぶついたりしたのかもしれない。

「……って、そんなことより」

見える限りの周囲を見回した。だが、暗すぎて全くここがどこであるのかわからない。床に触れてみると、木であることがわかった。ただ、フローリングにしては荒いようだけど。

どうやら小屋みたいところらしい。天井付近で雨がしきりに屋根を打つ音がする。それがうるさかった。

ふらつきながら立ち上がり、さっきは見えなかった背後も見た。微かに明かりが漏れていた。といっても明かりといえるほどのものではなかった。黒の中に少し薄い黒が格子状に無数開いていた。

近付いて確認しようと数歩進んだとき、何かがその前に横たわっていることに気付いた。

なんだろう。明かりがあれば……あつ。

明かりはある。僕はポケットへ手をつ込み、携帯電話を取り出した。開くと液晶の明かりが芒と光る。カメラ機能を立ち上げ、ライト機能をオンにする。電話の背に強い明かり点いた。その明かりで照らす。

「楳さん……！」

倒れていたのは楳さんだった。目を閉じ、仰向けに倒れている。駆け寄り助け起こした。楳さんの体はだらんとしていたが、温もりはあるし呼吸もしていた。ライトで照らしても外傷は見当たらなかった。

「良かった……」

安堵の息が出た。

「……郷原、くん」

楳さんの呼び声。彼女の顔を見ると、うつすらと目を開けている。

「楳さん、大丈夫？ 何をされた？ どこか痛む？」

「平気。それより、郷原くん、来て、くれたんだ」

弱々しく楳さんにはにかんだ。

「そりゃあ、だって とにかく、無事で良かった……」

本当に、良かった。だって、佐田さんが 佐田さん！？

「そうだ、佐田さん！」

「佐田さん？」

僕は楳さんを助け起こした。携帯電話のライトが点いている方向に向けて床に置き、楳さんの表情が見えるようにした。こんな状況なら当たり前だけど、楳さんは憔悴しているようだった。

「楳さん、佐田さんはどこですか？ 楳さんは佐田さんにここへ連れてこられたんだよね？」

「えっ……」

なぜか、数学の難題を途方に暮れながら取り組む生徒みたいな苦悶の表情を浮かべた。

「……あれ？ 佐田さんは、関係ない？」

だとしたら、僕は電話で誰と話したんだろう？ いやそれよりも、

「いったい誰が楳さんをこんなところに？ 僕もだけど。」

「まあ、いいや。それより、ここから出よう。扉だよな？」

僕は楳さんの背後を示して言った。楳さんは横へどこうとしたが、すぐにそれをやめて顔を伏せ、右手で口元を押さえた。表情は見えないけど、苦しんでいるように思えた。

「どうしたの！？」

咄嗟に思いついたのが毒。僕らをこんなところに連れ込んだやつが、楳さんに吞ませたりしたのか、と思った。

「ゴメン、ちよつと、気分が、悪くなつて。なんでもないよ。埃っぽいところにいたせいかな？ それより、ここは、開かないの。外から、鍵かなんかされてるみたいで」

手で口元を押さえながらのため、楳さんの声はじゃっかんかわつていた。

「えーと、そうか……でも、どうしよう」

開かないとなるとまさに八方塞。もつと小屋の中を調べてみた方がいいかな。

「ちよつとこの中、調べてみるね」

僕は携帯電話を手に取り立ち上がった。楳さんは僅かに俯いたまま、一度頷いた。それを確認して僕は振り返り、携帯電話の灯りを小屋中に撒いた。

「えっ……なんで」

いるはずのない、いや、いるとは初め思っていた。だけど、今はその確信が揺らいでいた。それなのに

光に照らされた小屋の中。ここがそんなに広くないことを知った。がらんどろとしていたが、ここは社なのかもしれない。僕らの背後四、五メートル後ろには壁があった。

そこに、佐田さんが座っていた。

澁刺とした短髪はくしゃくしゃになり、長い手足には無気力感が満ちている。頭からは血を流し、息をしている気配はない。

「ああっ……なんで……」

私がワタシは私

佐田さんが、死んでいる。

なんで、どうして……なんで佐田さんが……!?!
いや、まだ、決まったわけじゃない!

僕は傍まで駆け、佐田さんの名前を呼んだ。だが、まるで反応はなかった。携帯電話を投げ捨て、両手で肩を揺さぶってみた。けど反応はない。それどころか揺れに耐え切れず、佐田さんの頭は傾き、ちょうど僕の胸にとんと倒れた。

「……………。そんな……………」

震える手と腕で、佐田さんの頭を抱きしめていた。何をするんだよ郷原くん、とでも言ってくれるんじゃないか、と思って。だけどそんなことはなかった。佐田さんは冷たく、それは寒さで冷えただけのものではない。

「誰が、誰だよ。なんでこんなこと……………ふざけんなよ……………!」

畜生。畜生畜生! なんのために!

「ふざけんなっ!」

影も形もわからない犯人に向かって、僕は叫んだ。意味ない。意味なんてないけどさ。

「どうして佐田さんがこんな目に……………」

ぎしっ、と床の軋む音がした。きつと楳さんのものだ。傍へ近付いて来る。

「ねえ、楳さん、ふざけてる。いったい誰が……………」

首筋に、何か、冷たい、しかも、薄く鋭いものが、あてられた。

「楳……………」

「待ってたよ、郷原くん。君がここに来ることを……………」

電話で聞いた声だった。振り向けなかった。顔を見てやりたかったけど、首筋にあてられている何かが、抑止力となって僕にそれをさせなかった。

「楳さんは……………」

せめて問うた。

「楳なら寝たよ」

ああ、そうか、畜生。まるで気がつかなかった。僕ら以外の人間がいることにさえ気がつかなかった。不覚どころじゃない。僕はどんなつもりでここへ来たんだよ。楳さんが攫われているからだろう。なのに、なんで警戒を緩めた！

「さてと、何から話したものかな？ うーん、そうだな。初めてワタシが生き物を殺したときの話からしようか？」

言いながら、器用に僕の両腕を片手で掴み、後ろ手に捕らえた。これで僕は身動きが取れない。

佐田さんの頭は僕に倒れ掛かり続けた。

「そのただけに僕を呼んだのか？ そんなことより、どうして楳さんを攫ったり、佐田さんを」

「まあ聞けよ。おいおい答えるからさ。それに、君だって問題あるんだからさ」

問題？ 電話でも、そんなことを言っていた。

「なんのことだよ」

「だからおいおいだって。でもまあ、いいか。初めにそっちから入っても。」

問題つてのはさ、君が鈍感すぎることなんだよ」

「……………」

それは、佐田さんにも言われた。だけど、それがなんだと言うんだ？ どう関係するんだ。

「君は気付くべきだったんだよ。楳にも佐田さんにも好意を持たれていることを」

「はっ？」

「はっ、じゃないよ。だから今こんなことになっているのさ。それから、君が思うよりもずっと楳は繊細で傲慢であることにも気付いておくべきだったね」

楳さんが、傲慢？ なんだよそれ。

「いい加減にしるよ。なんで楳さんが傲慢なんだよ！ 楳さんはそんな人じゃない！」

「間違っちゃ困るね。郷原くんは君と接している楳しかほとんど見たことないでしょう？ あとは佐田さんと接しているときぐらい？ それでもさ、違和感には気付くべきだったよ。君以外の人と話するとき、楳はいつもどうしたらいいのか辛そうにしていたことを」

君以外の人間と、楳はまともに話そうとしていないことを

「特に楳は君以外の男子とは話したことがない。それはまあ、楳の過度な純真さの表れでもあるのかな。あと、楳は佐田さんと話すときが一番苦痛だった」

「それ、どういうことだよ？」

「だってさ、佐田さんは君のことが好きなんだぜ。つまり恋敵。憎くて憎くて仕方ないに決まっているじゃないか。それに二年生になつて楳だけが離れることになった。不安は募る一方さ。追い討ちを掛けるように、君と佐田さんはよく二人で話している。放課後や帰宅途中、朝の教室で」

「……………」

こいつが誰なのか全くわからないけど、どうやら、僕らにとっても近しい人らしい。会話振りからすると、クラスメイト？ でも、なんで佐田さんと話していたことを知っているんだ？ 誰も、近くに知り合いないでいなかったはずだ……………」

だが、誰？

「で、本題へ移ろうか。ワタシの話に」

僕は口を挟まず話しを聞く態度を示した。

「小学校低学年のときのことなんだけどさ、野良犬を殺したことがあるんだよ。自己防衛っていうのかな。襲い掛かってきたから持ってた傘で返り討ちにした。やりすぎて殺しちゃったけどさ」

ああ、楽しかったな

「……………」

背筋が、凍る。脊髄が、逆撫でられる。背後から爬虫類に抱きつ

かれたような悪寒。

「次は高学年のときかな。下校中、見知らぬ小父さんに声掛けられてさ。まあ、人攫いだったんだよね。不審者のポスターを見たことあったから咄嗟に逃げたけど、追いつかれて、だから殺した」

貼ったまま残っている、不審者のポスター。剥し忘れた事件。

「で、次は中学三年生のとき。これも下校中だけど、同級生の男子にからまれて、護身のためにね」

家出少年。

「私が殺したものは、基本的に誰にも見付からない。なぜかしらね？ 食べたわけじゃないからね」

この状況で、本当に冗談でも言ったつもりなのか、声の主はきやはっと笑声を漏らす。

「野良犬が死んでたって誰も気にしない。人攫いは無法なる藪の中の男子中学生は増水した河川の下流 海かな。それが末路」

言い終えると、僕の体を左前へ向けて押した。押された僕は体を反転しながら倒れ込むことになった。佐田さんの体は僕の隣に投げ出された。

「がっ………！」

背中を打った。咳が込み上げる。

倒れた僕は、すぐさま乗り掛かられて身動き出来なくなった。

右側から携帯電話の灯りが僕を照らしている。その灯りの範囲に、顔が現れた。

「君らはどうかな？」

梧さんが邪険に笑んでいた。

「どうして、楳さんが……！」

楳さんはにたにた笑う。そこに普段清廉で可憐な彼女の雰囲気は微塵もなかった。

「楳、ね。まあ、間違っではないんだけどさ」

面白がってる楳さんに、僕は憎悪と恐怖を覚えた。

「楳さんが、佐田さんを、殺したの？」

「イエス。だけどノーでもある」

間髪入れずに楳さんは答える。ああ、楽しくてしょうがないな、そんな呈をしながら。

「確かに佐田さんを心底殺したいと思ったのは楳だけどさ、実際殺したのはワタシなんだよね」

なぜなぞのような解説。

「どういうこと？」

「ワタシは楳であって楳でない。しいていうならクヌギって感じかな。楳の深層心理。欲望。本望。表なる裏。楳の真実。楳の本物。君にも誰にもあるだろう？ ただ、具現化はされないだろうけどさ」

……楳さんの本音、とでも言いたいのか。

「まあ、さしずめ楳の本音ってとこかな。その具現化」

「……………」

つまり、多重人格みたいなものと思えと？

「楳さんが多重人格者だなんて、聞いたことも見たこともない」

「そりゃそうさ。楳の深層心理で欲望で本望で表なる裏で真実で本物なんだからさ。楳でさえ気がつかないんだから。楳は自分が野良犬殺しだったり人殺しであったりする実感はなかった。まあ、ワタシと入れ替わってたんだからね。ワタシは楳の真。そして虚。楳の感情とか理性とかのたがが外れたら現れる。楳はワタシでいるあいだのことを夢として捉えている。実際、楳は野良犬に襲われた経験

はあっても、そこからはなんとか逃げ出したってという記憶しかない。知らない小父さんに話し掛けられたことはあっても、逃げ出したという記憶しかない。同級生の男子にからまれたという記憶はあっても、逃げ出したという記憶しかない。

「ただ、さすがにからまれた男子を殺した夢を見たような気がする次の日からその男子がいなくなれば、恐怖を覚えるだろうさ。それからだ。楳が誰かと接するのを極端に避けるようになったのは」

「だから、楳さんは誰とも群れず、部活にも入らなかった。郷原くんときだって、ワタシが出てきそうだったんだ」

「……………」

「だけど、君のまたねって言葉が温かすぎたんだね、これが。それに比べたらさ、君はだいぶ冷たかったけどね。だけどまあ、楳は君を信頼した。けど、君はそんな楳を友人の一人みたいな感じで捉えてただろう？ 拾ってきた猫ぐらい自分で面倒みるよ」

「これが楳の本音さ」

「楳は、過度に危険を意識しすぎるんだな、これが。自意識過剰って言うの？ ついでにこれも楳の本音。つまり楳自身は気付いてる。腹に何か鋭いものがあてられた。」

「まともな凶器を使うのはこれが初めてなんだな」

「楽しげに楳さん　クヌギは言う。はにかむように笑いながら。」

「じゃあ、最後に佐田さんを殺した顛末。朝一緒に図書室へ行く途中、放課後この神社で話があるって持ち掛けたんだ。そのとき、楳は佐田さんを殺すつもりだった。それで放課後、楳に人殺しは出来ないから、やってきた佐田さんをワタシが殺した。凶器はそこらに落ちてた大き目の石」

「じゃあ、説明終わったし、終わりにしようか」

「骸骨が囁く甘言のような恐怖を覚えた。」

「……………佐田さんみたいに、殺されるの？」

「うん。それが楳の望み。でも勘違いしないでね。楳は君が憎くて殺したいんじゃないから。愛憎っていうのかな？　なんとでも言え

るけど」

「じゃあ、ばーい

「つつ　　がっああああああああっ！　なん、で
腹部に激痛、否、死痛。痛い、痛いいたいいたい、痛いいたいイ
タイ痛いイタイツ！……ああああ！

血が溢れるのがわかる。咄嗟に手で押さえようとしたが、クヌギ
に両腕どころか体全体を押さえつけられていて出来ない。

「ふーん、ワタシからすれば鈍器の方が使いやすいな。あっちなら、
一回でみんななくなるのに」

冷静なクヌギの声がする。こんな状況なのに、クヌギの声は脳内
で直接響くようにクリア。クヌギの声のためなら痛覚は一步引くと
でも言うのか？　でも、痛いにはかわら……ああ……血が、口
まで血が……。

堪え切れず咳をし、血も吐いた。それを見てか、クヌギが笑う。

「じゃあ、仕上げ」

激る感覚の中でも、やはりクヌギの声は次元を異にする。

仕上げ……。

受容出来ない痛みの上に同じ痛みが　死ぬ……！

「ばいばーい。郷原くん」

携帯電話のライトが、そこで切れた。

「いやはや。キミ、しぶといね。キミのことが大好きな梧ちゃんはもう死んでるのに、どこまでも薄情だね。結構結構。で、どう？」

キミは梧ちゃんを許せるかな？ 無理だろうね。まあ、梧ちゃんは我儘だから。あの世で会ったらさ、嘘でも許すって言ってあげなよ。会えるわけないか。梧ちゃんは地獄行きだもんね、きつと」

暗闇の中、声が掛けられる。痛みならもはや麻痺し、なぜか聴覚だけが生きている。視覚も生きているだろうけど、こっ暗いんじや、死んだも同然。

「……誰、だよ」

なんとか、声は、出た。

「私かい？ 私は梧ちゃんの見守り人。ちょっと間違っているかな。まあ、梧ちゃんを守る人間にかわりないさ。色々梧ちゃんを助ける。例えば」

クヌギの殺人をばれないようにするとか

声はおかしげに言う。楽しくてしょうがないという風に、物足りないとしても言うように。でも、楽しく。

「私が野良犬も人攫いも同級生も処理したのさ。クヌギは殺戮だけが取り得だからね。殺したあとの処理はテキトーなんだよ」

「わけ、わかん、ない、よ」

「わからなくて結構。わかってても仕方ないよ。それじゃあ、ご冥福を。安心してよ。佐田ちゃんとキミらは別々に葬るからさ。佐田さんは一人、キミと梧ちゃんは一緒。ハピハピハッピー。最高のバツトエンドさ。つまりバツトエンドの中じゃ最低さ」

さあて、キミもそろそろくたばろうか？

……。

何か液体のようなものが顔に飛び散った。生温い。ちょうど、血みたいな

どさつと僕の上に何かがゆっくり倒れ込んだ。

「く、ぬぎ……」

「ゴメン、ね……」

「……………」

耳元で弱々しい声。クヌギのものではない。

「ゴメンね、郷、原く、ん。痛い、ね。痛い、よね」

「楳、さん」

顔の横に楳さんの顔。なんだか、胸の辺りが、濡れはじめた。血、かな。

「心中、みたいで、ゴメン ガハッ！」

楳さんが血を吐くのがわかった。体が微々と震えているのもわかる。

楳さんは

「許して なんて、ふざけてるよね」

こんな状況でも、彼女がはにかんだ気がした。

いつもみたい、語らうときのように、平和であるかのように。

「楽しかったよ、ずっと。話し掛けて、くれて、嬉、かった。ゴメン、ね。ありがとう」
と

途端に、楳さんの体が、重くなった。自分の身を全て委ね寝入る子のように

「楳、さん」

呼び掛けに、彼女が答えることはなかった。

失望的な痛みが、絶望的な孤独が、圧倒的な未来が、仮言的な答えが、命が、一つ、尽きた。それが、わかった。

「死なない、でよ。死にたく、ないよ……」

涙が出た。迷子みたいにいるんなことが急に怖くなった。

自分の内にはびこるもの。それはにくしみか、いとしさか、やるせなさなのか　わからない。

僕は、梧さんを怨んでいるのだろうか。わからない。少なくとも、僕は

引き戸が開くような音がした。

「いやはや、キミ、しぶといね」

聞いたことない、声がした。

11・12（後書き）

以上で『私がワタシは私』は終了です。最後までお読みいただき、誠に有難うございました。

私がワタシは私

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6888e/>

私がワタシは私

2009年6月29日19時18分発行